

神奈川県大磯町の家屋台帳に基づく研究

一 東海道大磯宿内の変遷と字大磯を中心に

Keywords

大磯町 家屋台帳 東海道大磯宿
字大磯 海水温泉



K08018 梅津 寛

1. 研究背景・目的

大磯町は、神奈川県南部に位置する町である。大磯町は、江戸時代に東海道の宿場町として栄え、明治中期から昭和初期には要人の避暑・避寒地として多くの政財界要人の別荘が建てられた歴史を持つ。

本研究は、公開されている家屋登記旧台帳を基に、歴史的に様々な役割を果たしてきた大磯町の集落形成過程、町並の変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

- ①公開されている家屋登記旧台帳に基づき、東海道大磯宿の町並を復原する。
- ②家屋登記旧台帳および絵図、住宅地図などを基に、東海道大磯宿から現在の大磯町になるまでの東海道沿いの集落形成過程を考察する。
- ③同様に、字大磯について絵図や地図を基に、考察する。
- ④『大磯町史』の記載から当時の状況を考察する。

3. 対象地域

大磯町は、神奈川県南部に位置する町で、面積は17.18km²で推計人口は32,998人である。町の東西を東海道が貫通し、町域を南北に二分している。北部には大磯丘陵とよばれる、高麗山・鷹取山があり、南部には相模湾が広がる。明治5年大区小区制、明治22年市制・町村制施行を経て、昭和29年に大磯町と国府町が合併して現在に至る。

本研究の調査対象地域は、家屋登記旧台帳が公開されている北本町・南本町・茶屋町・南台町・字大磯とする。

(1) 北本町

大磯宿を構成していた6つの町の1つである。南本町・茶屋町と並び東海道大磯宿の中で最も栄えていた場所である。江戸末期に描かれたとされる『大磯宿場絵図』から、小嶋本陣のほか、10軒の商人、11軒の旅籠屋が確認できる。

明治時代の家屋登記旧台帳に54軒記載されている。記載されている地番・名前と昭和20年の家屋名入地図および現在の住宅地図との照合を行った結果、場所を確定できたのは35軒である。

(2) 南本町

北本町と同様、東海道大磯宿の中心地として栄えてい

た場所である。『大磯宿場絵図』からは、石井本陣・尾上本陣のほか、11軒の商人、15軒の旅籠屋が確認できる。

明治時代の家屋登記旧台帳に64軒記載されている。照合を行った結果、場所を確定できたのは38軒。

(3) 茶屋町

北本町・南本町と並び大磯宿の中心地で、嶋立庵などがある。『大磯宿場絵図』からは、23軒の商人、17軒の旅籠屋が確認できる。

明治時代の家屋登記旧台帳に42軒記載されている。同様に照合し、場所を確定できたのは34軒である。

(4) 南台町

大磯宿を構成していた6つの町の中で最も西に位置し、現在は大磯町役場や妙昌寺などがある。

明治時代の家屋登記旧台帳に55軒記載されている。同様に照合し、場所を確定できたのは33軒である。

(5) 字大磯

少し東に外れ、東海道から海側に一筋入ったところにある。大磯宿成立当初に構成していた6つの町には含まれない場所にある。現在は住宅地となっている。

明治39年の家屋登記旧台帳に39軒記載されている。同様に照合し、場所が確定できたのは21軒である。



図1 対象地域

表1 照合結果

	北本町	南本町	茶屋町	南台町	字大磯
記載軒数	54	64	42	55	39
照合件数	35	38	34	33	21

4. 東海道大磯宿について

慶長6年(1601)、東海道に宿駅伝馬制度が制定されると、神奈川・保土ヶ谷・藤沢・平塚・小田原などと並んで最初に設置された宿場の一つで、江戸から八番目の宿場である。日本橋からの距離は16里27町(65.8km)。

江戸寄りの平塚宿との間はわずか27町(2.9km)と短く、一方、小田原宿との間は、4里(15.7km)で比較的長く、南側の海と北側の山に挟まれた細長い町並であった。

宿内の家並みは、長さ11町52間(1.3km)、江戸方より街道に沿って、山王町・神明町・北本町・南本町・茶屋町(石船町)・南台町の6町で構成されている。天保14年(1843)の人口は3056人、家数は676軒で、3軒の本陣と66軒の旅籠は北本町・南本町・茶屋町に集中し、問屋場は北本町と南本町の2カ所にあった。



図2 大磯宿拡大図

5. 本陣について

本陣とは、宿場で大名や旗本、幕府役人、勅使、宮、門跡などの宿泊所として指定された家のことで、宿役人の問屋や村役人の名主などの居宅が指定されることが多かった。一般の旅籠屋と違い、特権として門、玄関、書院を設けることができた。

東海道大磯宿には3つの本陣があり、そのうち北本町に小嶋本陣、南本町に尾上本陣・石井本陣がある。

図3 小嶋本陣間取り図(1855)

6. 家屋登記台帳について

家屋台帳は、昭和22年(1947)に家屋については、その状況を明確にするために施行された家屋台帳法に基づいて設けられた制度である。しかし、家屋台帳そのものは、それ以前の明治20年代ごろから全国で散見される。

家屋台帳には、所在地、家屋番号、種類、構造及び床面積、所有者の住所及び氏名又は名称などが記載される。

6. 公開されている家屋登記旧台帳について

現在、大磯町では明治時代の家屋登記旧台帳が公開されている。家屋登記旧台帳には、字、地番、地主、家主、家屋番号、家屋の用途、屋根の種類などが記載されている。また、家屋位置及方位では家屋の大きさ、道との位置関係や配置図が記載されている。字名、地番から場所を特定し、集落形成過程を考察する。

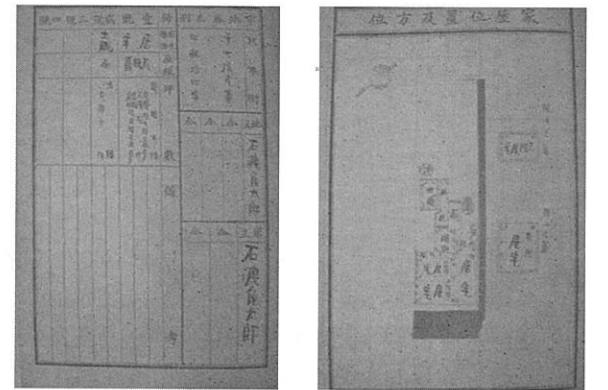


写真1 家屋登記旧台帳

7. 宿内の様子

各時代の絵図・地図および家屋登記旧台帳を基に、現在の白図に落とし込みを行い、当時の東海道沿いの大磯宿の構成を明らかにしていく。

(1) 江戸時代 天保13年頃(1842頃)

天保13年頃(1842頃)に描かれたとされている『大磯宿場絵図』には、東海道沿いの建物の所有者や使用用途の他、間口銀などが描かれている。

これらに基づき、家屋の職業別に色分けを行い、現在の白図に落とし込む。



図4 『大磯宿場絵図』照合結果

北本町・南本町には本陣、問屋場があり、宿場の中心地であったことがわかる。旅籠・商家が並び、その奥に寺院・神社が立地する。また北本町・南本町には女抱主屋があるのに対し、茶屋町には1軒も無い。一連の宿場ではあるが町によってやや性格が異なる。

北本町・南本町・茶屋町の東海道沿いに専用住宅はなく、商人が全体の約半数を占めていることがわかる。

(2)明治時代

公開されている家屋登記旧台帳より家屋用途別に色分けを行った。その際、地番および名前の照合により場所を確定していく。



図5 『家屋登記旧台帳(明治時代)』照合結果

浴室別棟型の家屋が現れ始める。この時期は、海水温浴旅館が大流行し、浴室別棟型家屋が旅館として使用されていた例もある。先行研究において、浴室別棟型が後の別荘建築に影響を与えたと述べられている。

一方、小嶋本陣は解体され、規模の小さな複数の家屋が建てられている。このように、近代以前に必要とされていた宿場の大型施設は解体され、敷地が細分化・均質化する事例がある。

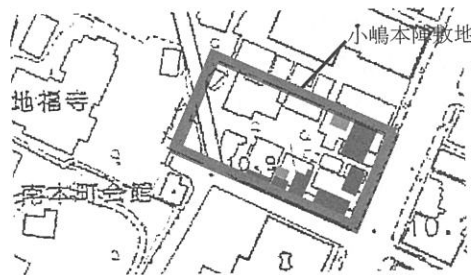


図6 小嶋本陣跡地

(3)昭和時代

『大磯町家屋名入地図(昭和36年)』より、職業別に色分けを行った。



図7 『大磯町家屋名入地図(昭和36年)』照合結果

北本町・南本町の辺りには、商業を営む人が多く見受けられる。しかし、小田原寄りの茶屋町に向うに従って東海道沿いにも専用住宅が多く現れるようになっていく。大磯町の役割が郊外住宅地に移行し始めていくことで、徐々にそれぞれの町の特徴が現れ始める。

(4)平成時代

2009年の住宅地図より、職業別に色分けを行った。

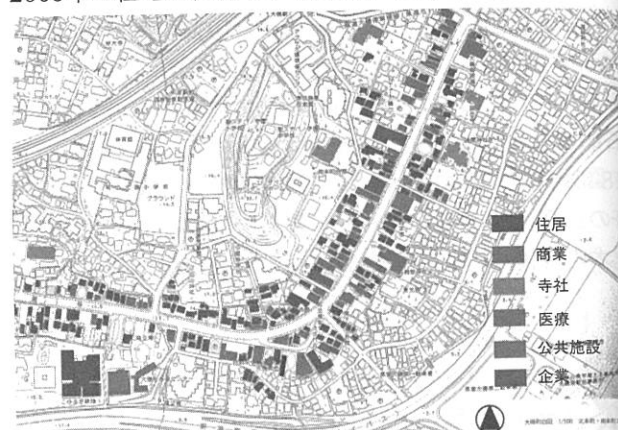


図8 『住宅地図(2009)』照合結果

東海道沿いでは商業を営む人が減り、専用住宅の数が増えているのがわかる。自動車の普及など交通の発達により、郊外住宅地としての新たな役割を担うようになっている。

8. 字大磯の推定

江戸時代の様子を描いた『東海道分間延絵図』、明治21年に描かれた『相陽大磯驛全圖』および『迅速測図』には字大磯の位置に建物が確認できないが、明治39年の家屋登記旧台帳が存在する。つまり、字大磯の住宅は、この間に建てられたものと考えられる。

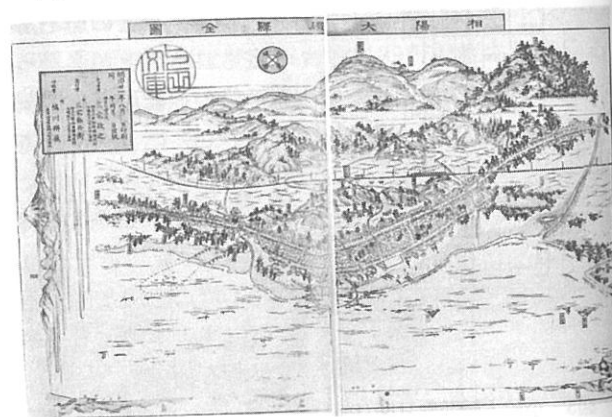


図9 相陽大磯驛全圖(1888)

この間の明治23年に長者町が誕生しており、字大磯の位置と酷似している。ここで長者町についてまとめる。

(1)長者町の誕生

大磯宿を構成していた南本町の下町である南下町は漁師町であった。明治23年に南下町で大火が発生した。全体の約70%にあたる160戸以上が焼失した。当時の宅地は1戸あたり7,8坪から20坪未満で、1.4ヘクタールに230戸

以上の家屋が群集していた。そのため非衛生的であり悪疫を発生させやすく、また火災が発生すると延焼を防ぐことができなかった。

これを受けて町長・町議は南下町の状況を改善すべく、漁業者の利便を図り移転先を山王後に設定する罹災者移転計画を計画した。これに70戸余が応じ、同年に移転が完了、長者町が誕生した。

(2)字大磯の住宅の特徴

区画整理がはっきりなされている場所で、計画的な町づくりであったと思われる。

平面構成を見てみると、家屋登記旧台帳の家屋位置及方位から住宅の土間が占める割合が高いことがわかる。また、部屋の数が少なく住宅の規模としては小さいものである。

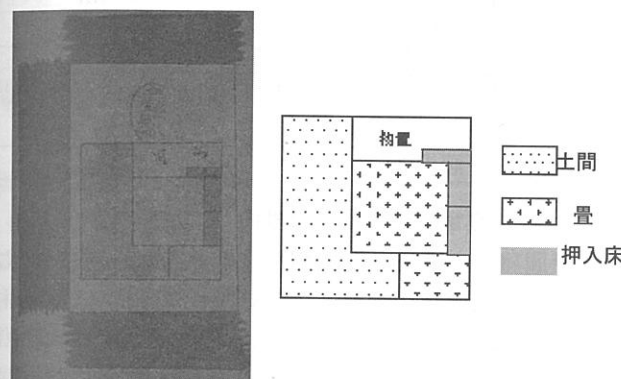


図10 字大磯の住宅平面構成(図11*)

(3)生業

漁師町であった南下町からの計画的移転であったこと、山王後という漁業者の利便を考慮された海寄りの場所であったことから漁家であったと推定した。

以上より、字大磯が現在の長者町と一致していると断定し、字大磯の家屋登記旧台帳に記載のある住宅は漁家であったと断定した。区画整理がはっきりなされた計画的な町並であり、およそ4間×7間の計画的移転による都市計画である。

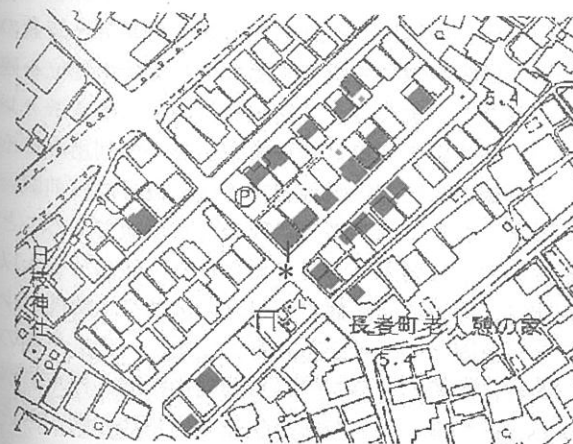


図11 字大磯照合結果(*が図10の住宅)

9. まとめ

江戸時代には、宿場町としての役割を担う本陣などの大型施設、旅籠や商家などが軒を連ねる。明治期に入ると宿場町としての役割を終え、大型施設が解体され敷地の細分化・均質化する事例や、海水浴場の開設に伴う観光客の増加、海水温浴旅館の大流行で浴室別棟型家屋の出現が見られるようになる。昭和に入ると小田原寄りの茶屋町を中心に、東海道沿いにも専用住宅が現れ始める。この郊外住宅地としての役割が平成に入っても続き、専用住宅地が増え商店が減少している傾向にある。

字大磯の住宅は、明治23年に火災がきっかけで南下町から山王後に計画移転された長者町と場所・時期ともに一致することから、長者町の一面であったと考えられる。面積は大きいもので7坪程度であり、広い土間を持つ。また部屋の数も少なく、規模の小さな住宅が並ぶ。明治中期の貴重な都市計画事例である。

10. 資料まとめ

表2 資料まとめ

資料名
大磯宿場絵図(江戸末期)
「相中留恩記略」挿画
大磯宿拡大図
大磯宿々割り図(江戸時代)
「明治二十七年一月改正建物台帳」記載建物一覧
「家屋台帳(明治32年以前)」掲載建物一覧
小嶋本陣間取り図(安政2年)
宿方絵図面書上帳(江戸時代)
東海道分間延絵図(文化3年)
迅速測図(明治21年)
相陽大磯驛全圖(明治21年)
大磯名勝誌(明治時代)
相陽大磯一覽之図(明治時代)
神奈川県大磯明細全圖(明治27年)
大磯町全圖(昭和7年)
大磯町家屋名入地図 町会別(昭和36年)



図12 神奈川県大磯明細全圖

参考文献

- 1)大磯町 「大磯町史2資料編近世(2)」 (1999)
- 2)大磯町 「大磯町史6通史編古代・中世・近世」 (2004)
- 3)大磯町 「大磯町史8別編民俗」 (2003)
- 4)大磯町HP <http://www.town.oiso.kanagawa.jp/>
- 5)歴史的農業環境閲覧システム
- 6)昌平坂学問所地理局編纂「新編相模国風土記稿」 (1841)